

# ローラ・ホワイトの文書宣教活動に見る女性解放思想 ——翻案著作『五更鐘』の分析を中心に——

張 語 涵

はじめに

筆者はこれまでアメリカ人女性宣教師ローラ・ホワイト (Laura Marsden White / 亮楽月, 1867.10.13-1937.1.24) の中国における宣教活動を調査してきた。アメリカ・メソジスト監督教会 (Methodist Episcopal Church) に所属したホワイトは、1891年に同教会の女性海外伝道協会 (Woman's Foreign Missionary Society) から中国に派遣され、1934年までに音楽教師、女子学校の校長、女性向け雑誌『女鐸』の編集長として活動した。また、文書による宣教活動の一環として33本以上の中文書籍と歌曲を出版・創作しており、主に宗教小説の翻訳、女性地位の向上や、女子教育に関わる著作を刊行している。

ホワイトは中国におけるキリスト教宣教師の中でも着目されている人物の一人であり、これまで『女鐸』編集長や南京滙文女子学校校長としての言論にかかわる検討が中心となされてきた。なかでも代表的なのは、中国人女性の家庭、婚姻、教育及び女性運動などを検討するチョウ・ユンの研究である<sup>1)</sup>。チョウは1912年から1951年までに発行された『女鐸』を分析し、同誌を通して中国へ輸出されていたキリスト教的な理想的な女性像を研究対象に、その理想像がいかに中国人の家庭観に影響したのかを論じた。その際に、チョウはまずこの文化輸出の積極的な意義を確認した上で、教会のみならずアメリカ人女性宣教師と中国人女性信者らが、家庭を主とする女性を理想的な女性像として崇拝するヴィクトリア朝的女性観<sup>2)</sup>の影響を受けていたことを指摘している。

また、ホワイトの小説翻訳・出版にかかわる研究としては、宋莉華とウォン・ティンケイの研究が挙げられる<sup>3)</sup>。前者の宋は、ホワイトを評して「宣教をすると同時に、意識的に女性と児童のための読み物を創作、翻訳し」、「当時、女性と児童の読み物が極めて少ない状況において、ホワイトの小説は思想を導くという意味で役立っていた」と論じている<sup>4)</sup>。これに対して、後者のウォンはホワイトが言語、文化、種族などの壁を越えて、翻訳小説『小公主』<sup>5)</sup>の主人公であるセイラを通し、中国人女性らに、英国のヴィクトリア朝的女性観における自己犠牲の精神を体現することの重要性を強調したことを確認した。ウォンはこの「ヴィクトリア朝の理想」とする自己犠牲の精神は、「五・四改革派が考えていた平等権などのジェンダーの観念よりも保守的であった」と結論づけている<sup>6)</sup>。

すなわち、女性宣教師ホワイトをめぐる評価としては、彼女を中国フェミニズム思想の流れの中で女性解放に貢献した人物として描く傾向が強い。彼女のヴィクトリア朝的女性観は

「より保守的」であるとの一定の留保を加えつつも、当時の中国社会においては、そのような限定的なあり方もまた中国人女性の解放を助けたのだと位置づけられる。こうした評価は大筋において誤りではないとしても、十分な具体性を欠いている。すなわち、これら従来の研究ではホワイトが出版した小説についても、著書出版活動を始めた経緯、中国人助手との関係、翻訳というよりも翻案の作業の内実、中国の伝統的な社会と家父長制への評価などが十分に検討されていない。彼女が『女鐸』編集長や南京滙文女子学校校長として発信した宣教事業に関わる言論の特徴を明確化するためにも、文書宣教活動においてホワイトがだれに対して、どのようなメッセージをどのように伝えようとしたのかを解明するという課題が残されている。これらの疑問を解くことによってはじめて、ホワイトの活動への評価が可能になると言える。

さらに、ホワイトの存在が当時中国で活動していたアメリカ人女性宣教師の中でどのような位置を与えられていたのかについても見極める必要がある。アメリカ人女性宣教師については、王曉慧及び胡金平<sup>7)</sup>が、1890年代から1920年代に来華した女性たちによって中国女子教育事業に熱意が傾けられた理由を分析している。王と胡によれば、「その理由の一つはアメリカの女性宣教師のセクシャル・アイデンティティ (Sexual identity) に基づくものであり、女子学校を興すことによって中国人女性を救うことを目的としたことにある。もう一つの理由は、彼女らにおいて内面的な宗教信仰と女性英雄主義が呼応しながら、中国人女性たちを救おうとしたことにある。その背景に存在する深い原因は、当時のアメリカ国内における女性の教育状況と就職活動との間の不整合性である」<sup>8)</sup>。つまり、教育を受けた後、社会で活躍したいと願っていたアメリカ人女性たちが、実際に活躍できる機会と場所をあまり持つことができなかつたため、中国人女性らの教育と社会進出の充実に力を入れた、ということである。

この点を踏まえれば、ホワイトの宣教事業を評価する上では、アメリカから派遣されたアメリカ人宣教師としての立場と、女性としての立場がどのような形で絡み合っていたのかという着眼点が必要となるとわかる。この点に関わって参考にするべき考察として、ルーシー・ピーボディという一人の女性宣教師の生涯を通じて、アメリカ人女性宣教師の活動を分析した小檜山ルイの研究がある<sup>9)</sup>。小檜山は「宣教師は帝国主義の手先だったのか」という問いを「キリスト教の海外伝道を研究すれば向き合わざるをえない」ものと位置づけた上で、「良くできた〔長く続いた：引用者注、以下同〕帝国、帝国主義、植民地主義が、単純な抑圧と搾取のシステムではなく、支配者と被支配者の間のある種の同意、容認、あるいは、親密性を含むものだとするならば、結局において、宣教師はそうした帝国主義の支配に資したのではないかと論じる。例えば具体的には、小檜山はピーボディが婦人伝道局の有給職員として「伝道地」インドでの経験や「野蛮な異教徒」の話をアメリカ国内の女性たちに向けて語りながら献金を呼びかけた点に着目し、こうした語りは「優越感とそれゆえの義務感」、あるいは「帝国主義的感性」に彩られており、「白人女性キリスト教徒としての共通のアイ

デンティティ」(宣教に役立つ)によるものでもあったと論じている<sup>10)</sup>。

以下に見ていく通り、ホワイトは中国での宣教活動において、女性を読み、書くことができるようになることを重視していた。ただし、そのことは、ホワイトが帝国主義的な「優越感」から自由であったことを必ずしも意味しない。筆者は、この帝国主義的な「優越感」という要素に注目することで、ホワイトをはじめとする、アメリカ人女性宣教師と中国人女性との関係性をより立体的に評価することが可能になると考える。以下、本稿では欧米的なキリスト教家庭の様式と清末中国に根強く存在していた家父長制との衝突の中で、ホワイトがどのように文書宣教事業を行ったのかを、『五更鐘』(初版1907年)を中心とする彼女の出版物の分析を通して明らかにしたい。

### 一、ホワイトのキャリア形成

ローラ・ホワイトは、1867年にアメリカのメリーランド州ボルチモア(Baltimore)に生まれた。父親のエベニーザ(Ebenezer Holman White, 1843-1880)はホワイトが13歳の時に亡くなった。母親のアナ(Anna Marsden White, 1843-1914)はイングランド系アメリカ人であった<sup>11)</sup>。

長女であったホワイトは1878年、11歳の時に父親が所属した長老教会(Presbyterian Church)で受洗し、82年にフィラデルフィア高校(Philadelphia High School)を卒業して公立学校の教員として務めた。85年に18歳で母親の所属するメソジスト監督教会に転会した後、ウェルズリー・スクール(Normal Wellesley Preparatory School)及びシカゴ・トレーニング・スクール(Chicago Training School)でさらなる教員訓練を受けた。その後、90年に教会によって中国への宣教師に任命され、翌年に中国鎮江にある女子学校の音楽教師となった<sup>12)</sup>。1902年、宣教師らの中国語教師である陳春生と共に『五更鐘』の翻訳作業を開始し、長老教会ミッションの中文週刊誌である『通問報』(上海)に連載した。1907年には『五更鐘』の活字印刷版をキリスト教出版社である上海美華書館から発行した。同年にはテンプル大学<sup>13)</sup>の学士号(Bachelor of Humanities, Honours)を取得し、ミッション系学校であった南京滙文女子学校(当時の名称はLawrence Hall Girls School)の校長に着任している。1912年、後述する広学会の女性向け雑誌『女鐸』の編集長に就任し、同年から29年までは同誌の主筆として活動し、34年に宣教師職を辞した。生涯未婚であった。

ホワイトが所属したメソジスト監督教会は1874年にメリーランド州に設立された。アメリカにおけるメソジスト派は、1844年から1939年の間は、奴隷制度への対応をめぐる分裂し、北部の「アメリカ・メソジスト監督教会」と南部の「南メソジスト監督教会(The Methodist Episcopal Church South)」が並立していた<sup>14)</sup>。南北のメソジスト監督教会は共に、1930年に至っても男性と女性の聖職者の地位や待遇などが統一されていなかった。教会組織の内部では、女性聖職者が長い間差別的な扱いを受ける一方で、女性は「社会における信仰と道徳のモデル」として位置づけられていた。このような葛藤の中で、南北の女性会員た

ちは、それぞれ女性海外伝道協会を設立した。

ホワイトはそのような背景の中で中国に派遣され、教員として務めながら本を出版していた。著作の内容は家庭生活、宗教小説、歌曲、女性問題、教育など、様々な分野に関わっていたが、このうち宗教小説の翻訳と創作の作品数が最も多い。以下に示す表1は、広協書局編『中華基督教文字索引（華英合併）』（1933年）、『中華基督教文字索引（華英合併）補遺』（1938年）に基づき、ホワイトの著作を抽出し、年代順に整理したものである。

表1. ホワイトの中文著作物の一覧

著者・訳者	中文書名（英文書名）	出版年・出版社・出版地	索引に基づくカテゴリー	価格 <sup>15)</sup>	頁数
ホワイト・余鉄庵訳	獄中花 (Picciola, the Prison Flower)	1903・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.20	124
ホワイト訳	貧子奇縁 (John Ruskin: The Brush Merchant. 4th Ed)	1903・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.06	28
ホワイト・陳春生訳	小英雄 (Mrs. Burnett: Little Lord Fauntleroy. 3rd Ed)	1903 <sup>16)</sup> ・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.30	174
ホワイト・陳春生訳	五更鐘 (Five Calls)	1907・美華書館・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.30	Vol. 1: 43 Vol. 2: 48
ホワイト著、袁玉英訳	改良家政小史 (The Homemakers. 4th Ed)	1913・広学会・上海 <sup>17)</sup>	家庭生活	0.10	87
ホワイト・周澈朗訳 <sup>18)</sup>	小公主 (Mrs. Burnett. Sara Crewe)	1914・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.10	42
ホワイト通訳、袁玉英筆述	蒙養準繩 (Susan Chenery. As the Twig is Bent: A story for Mothers and Teachers)	1915 <sup>19)</sup> ・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.20	80
ホワイト・袁玉英翻案	聖跡扶微 (Scenes from Ben Hur and Other Tales of the Christ. 2nd Ed)	1916・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.20	45
ホワイト訳	乱世女豪 (Romola)	1917・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.25	170
ホワイト・Miss I-DJU DJU 訳	韋師母在包菜園 (Alice H. Rice. Mrs. Wiggs in a Chinese Cabbage Patch)	1917 <sup>20)</sup> ・広学会・上海	宗教小説・主日学課・寓話	0.12	68
ホワイト整理	学校歌 (Songs for School)	1917・広学会・上海	選歌	0.20	音楽書 (12曲)
ホワイト整理	静妙園乙種琴歌 (The Joy field Song Book)	1921・広学書局・上海	選歌	0.50	音楽書 (曲数不詳)
ホワイト著、許耐芦筆述	世界女族進化小史 (History of Woman's Social Progress)	1925・広学会・上海	婦女の地位および待遇	0.40	186
ホワイト編、Hsu Yoh Ing 訳	基督教家庭中の規則 (Good Manners In The Christian Home)	1928・広学会・上海	家庭生活	0.10	87
Mrs. Sheng Hwa fang・ホワイト訳	悔過記 (Old Auntie Liang. 2nd Ed)	1928・広学会・上海再刊行	宗教小説・主日学課・寓話	0.05	40

ホワイト著	児童の聖杯 (Finding the Holy Grail)		宗教小説・主日学課・寓話	0.02	9
ホワイト著、Cheo Tsai Lau 訳	馬賽勒斯 (Silas Marner)		宗教小説・主日学課・寓話	0.23	8
ホワイト著	児童所得之聖杯 (The Child Who Found the Holy Grail)		宗教小説・主日学課・寓話	0.04	未注不明
ホワイト訳	荷蘭二小人 (Mary Mapes Dodge. Hans Brinker or The Silver Skates, A Story of Life in Holland)		宗教小説・主日学課・寓話	0.23	79
ホワイト著	女子の真進歩 (Step Lively)		婦女の地位および待遇	0.03	18
ホワイト著	嬰兒学堂教授法 (The School of Infancy)		教育	0.10	52
ホワイト作	宣傳福音歌 (There's A Wideness in God's Mercy)		琴譜	0.03	1 曲
ホワイト作	小人晩禱歌 (Child's Evening Prayer)		琴譜	0.03	1 曲
ホワイト整理	主恩の滋味 (Taste and See)		琴譜	0.05	1 曲
ホワイト・Hsu Nai Lu 作	卒業游芸傳光 (Send Out Thy Light)		琴譜	0.08	1 曲
ホワイト整理	做禮拜用之琴譜 (Musical Aid to the Worshipful)		琴譜	0.05	1 曲
ホワイト整理、Myra B. Olive 作曲	蘇州師範琴歌 (The Soochow Normal Song Book)		選歌	0.35	音楽書 (14 曲)
ホワイト作	元旦歌 (New Year's Carols)	1917・『女鐸』5 卷 10 期に掲載	選歌	0.03	1 曲
ホワイトが Wagner から改作	卒業歌 (Chorus for Commencement. Chinese and English.)		選歌	0.03	1 曲
John Rogers Fryer 改作、ホワイト調和	拒毒歌 (The Insect Invasion. Chinese Melody)	1921・『女鐸』10 卷 5 期に掲載	社会福務歌	0.03	1 曲
ホワイト著	韓安麗女士傳 (Life of Anne Heselstine Judson)		牧師宣教師	0.05	32
T. Y. Sung・ホワイト著	女大善士伊利賽伯 (Elizabeth Fry)		社会	0.10	44
ホワイト著	創立上海濟良所包慈女士傳 (Miss Bonnell and Her Work)		社会	0.05	未注不明

表 1 から窺われるように、ホワイトの出版物の中には、現存しておらず出版時期が確認できないものも複数存在する。一方で、初出時の記録が残されているものに着目すると、その多くの作品が次章で触れる広学会に関係していることがわかる。『索引』及びその補遺に「宗教小説」として掲載されている著作物は合計で 35 点、その中でホワイトを著者に含むのは 13 点で、著者別の作品数は最も多い。ホワイトは宗教小説の代表的な書き手であった

と言える。

## 二、広学会の成り立ちと『五更鐘』出版の背景

広学会は、同文書会 (Society for Diffusion of Christian and General Knowledge among the Chinese) を前身とする。1877年に上海で創立された同会は、中国プロテスタント宣教師らの「学校及び教科書委員会 (School and Textbook Series Committee)」の書記であったロンドン宣教会宣教師 A・ウィリアムソン (Alexander Williamson／韋廉臣, 1887-1902 在任) の中国における西洋書籍の翻訳・出版事業の一環として設置され、1892年に広学会 (The Christian Literature Society for China) と改名した<sup>21)</sup>。ウィリアムソンに次いで、英国バプテスタ宣教会宣教師ティモシー・リチャード (Timothy Richard／李提摩大, 1903-1919 在任) が責任者に就任した<sup>22)</sup>。

同会とホワイトとの関わりについては、彼女が 1929年に著した「婦人と児童は最後に」という文章<sup>23)</sup>における、以下の一段から窺われる。

〔広学会が成立された〕数年後、ヤング・J・アレン博士<sup>24)</sup>は女性や子供のために書かれた出版物が事実上存在しないことに気づき、偉大な著作『全球五大洲女俗通考』を書き始めた。これは美しい挿し絵を添えられた簡潔な伝統的な文理〔古典文〕で書かれた 10巻の百科事典である。これが中国における女性向けの文学の始まりである。悲しいかな！女性や子供らはこれらの魅力的な本を読むことができなかつたし、中国の男性らもこのシリーズを買って〔女性や子供たちに〕読んで聞かせることはしなかつた。ほこりと本の虫だけがこの上品な事典を気に入り、その後、学校の図書館に賞品やプレゼントとして贈られることで処理された。その後、ミス・ローラ・ホワイトは震える手で思い切って『ほうき職人』と『ピッコラ：監獄の花の物語』をあらわしてかの教養あふれる会 (the learned Society)〔広学会〕に提出した。この二つのお話は、当時の広学会の学者的精神 (erudite spirit) にはそぐわないかのようであった。しかし、どちらも由緒正しいものであった。『ほうき職人』はジョン・ラスキンが編集協力しており、『ピッコラ』は有名なフランス古典である。どちらも疑いの目を以て受け止められ、嫌々ながら本棚に置かれていた。翌年には『小公子フォントルロイ』が出版され、しばらくしてマクギリヴェイ夫人の『広い世界』が受け入れられた<sup>25)</sup>。

文章の名前が「婦人と児童は最後に」とされたのは、当時中国人男性を対象とする翻訳作品が作成されていたのに対し、中国人女性のための作品が存在しないことを残念に思う気持ちを表現するためだろう。アレンの『全球五大洲女俗通考』の出版は 1903年である。ホワイトは同シリーズが中国女性文学の始まりであると認識すると同時に、彼女自身（その引用文では三人称で書かれているが、ホワイト自身により書かれたものである）が中国女性文学



を始めた最初の女性宣教師の一人であると自覚していたと考えられる。

また、ホワイトは文理<sup>26)</sup>という古典文体で書かれた百科事典は女性にとって「高レベル」に過ぎるため、男性たちの助けによらなければ読めないものと考えた。これに対して、自身による翻訳小説である『ほうき職人』や『ピッコラ』は、従来の広学会が刊行した学問的な書物とは異なり、同会には「疑いの目を以て受け止められ」たが、成功を収めたとしている。すなわち、アレンの女性向け出版物が実は女性には適していないとの考えを婉曲に示した上で、自身が中国人女性に適する本を出すことに成功し、歓迎されたとの認識を提示している。

このように、ホワイトはアレンの影響で中国人女性を対象読者とする出版物の作成を志したわけだが、実際に文章を読める女性は極めて少ないという現実と直面していた<sup>27)</sup>。書物を読める女性を増やすためには女性向けの学校を創設し拡張しなくてはならない一方で、この学校を魅力的な存在と思う人々を増やすためにも魅力的な書物を出版しなくてはならなかった。こうした状況の中で比較的によく読まれて版を重ねることになったのが、『五更鐘』であった。

### 三、『五更鐘』の成り立ち

『五更鐘』の初版は1907年に上海美華書館によって刊行された。筆者が入手した1909年版には「第三版再版」と記されており、刊行の翌々年には同書館によって再版されたことが確認される<sup>28)</sup>。美華書館(American Presbyterian Mission Press)は上海北京路にある、アメリカのキリスト教長老会が中国に設立した出版・印刷組織である。1844年にマカオにおいて華英校書房として創業し、翌年に寧波に移転して華花聖經書房と改名した。60年に上海大南門外、後に北京路に移り、美華書館として知られるようになった。また、美華書館は同じキリスト教系の広学会と協力関係にあり、広学会の書籍の印刷及び代理販売を請け負っていた<sup>29)</sup>。

『五更鐘』は『中華基督教文字索引(華英合併)』(1933年)では「宗教小説・主日学課・寓話」というカテゴリーに所属するものとされているが、陸国飛の『清末民初翻訳小説目録(1840-1919)』(2018年)では「社会小説」に分類されている。『五更鐘』は巻頭で「社会改良小説」を名乗っており、当時の梁啓超の「社会改良小説」という表現を踏襲している。1895年に清朝が日清戦争で敗北した後、梁啓超は小説の「社会的機能」、すなわち大衆への影響力を重視し、清朝(国家政治)を変えるために西洋の小説を紹介し始めた。さらに、伝統的な中国の小説は中国社会の改革には役立たないとする一方で、西洋の小説は社会改良を含む実学的な意義を有すると主張し、その翻訳に力を入れた。「社会改良小説」を名乗る『五更鐘』の冒頭には、「米国亮楽月命意、潤州陳春生編」と書かれている。亮楽月はホワイトの中国名である。文字通り読めば、ホワイトが小説の内容・主旨を陳春生に伝え、陳がその物語の編集を行ったと推測される。

陳春生は1867年に鎮江市潤州に生まれ、5人の息子と1人の娘を持った。1902年に『通問報』の主筆となって上海に転居した。喬昭の研究<sup>30)</sup>によれば当時としては社会的地位が高い家族であったことが分かる。彼は1880年代から宣教師たちの中国語教師として働いた。一方、ホワイトは1891年に鎮江に派遣され、現地で音楽の教師を務めていたことから、二人の関わりは鎮江で始まったと思われる。上述の『五更鐘』第三版には陳の「自序」が載せられている<sup>31)</sup>。

1902年の春、亮女史（ホワイト）は私にもう一冊の本を一緒に翻訳するようと言った。原文はロシア人の手によるもので、〔その分量は〕『五更鐘』の全体の2-3割を占める。草稿が完成した直後、亮女史は私にこう言いつけた。この本を編集するにあたり、中国人のために語らなければならない。決して原文にこだわってはいけない。原文は家を建てるための支柱だと思って、その中の扉と窓の位置はどのように配置し、壁はどのように塗装するのかは陳さんに任せる。原型だけを保持し、中国〔の状況〕に従って内容を変えねばならない。

引用文における「ロシア人」とはトルストイ (Leo Tolstoy, 1828-1910) を指す。『五更鐘』がベースとした作品は彼の宗教小説の英訳版 *Walk in the Light While There is Light* であると考えられる（フランス語版であった可能性もある。日本語訳本『光あるうち光の中を歩め』の初版は1928年に出版）。左維剛及び呉淳邦の研究<sup>32)</sup>によれば、英語版の原作は6、70頁で、全部で10章ある。それに対して、翻訳された『五更鐘』は24章であり、上冊と下冊に分けられ、「序」などを入れ、200頁ほどである。トルストイの小説の登場人物は9人であるのに対して、『五更鐘』の登場人物は18人である。英文版の主人公の名前はJuliusで、父親のJuernalisと親友のPamphylus以外の人物には名前がなく、「Juliusの母親」、「Juliusの妻」などと呼ばれている。『五更鐘』では、陳春生は小説中の人物に中国式の姓名を名付け、主人公である九如の生涯を描いた。

ホワイトは上記の「婦人と児童は最後に」という文章で『五更鐘』の翻訳過程に関わるティモシー・リチャードとの対話を以下のように記録している。上述のように、ティモシー・リチャードは清朝中国におけるバプテスト教会のキリスト教宣教活動に携わったウェールズ人宣教師で、広学会の総幹事 (General Secretary) である。

「この本の題名は何にすれば良いでしょう？」と彼女は〔リチャードに〕尋ねた。「これは翻訳でもなければ改作でさえもない。トルストイは、中国の服を着て、共産主義を取り除かれ、正統的な天国、地獄、悪魔と天使が加えられた彼の子供〔ホワイトがトルストイの作品をベースに書いた『五更鐘』〕を、ほぼ間違いなく自分の子とは認めないでしょう！キリスト教を弁護するとき、私はブラウニング、ラスキン、フィリップス・ブ



ルックス、ライマン・アボット、ヘンリー・ドラモンド、そしてバトラーの『宗教の分析』さえをも引き合いに出したのです。」

「我が子よ」と、有名な中国研究者〔リチャード〕は述べた。「あなたは独自の物語を書いたのだよ」。

「でも独自のアイデアはほとんど入っていません。」

「そうは思わないよ」、というのが答えであった。「新思想は一世紀に二、三しか生まれないものだ」。

この本、すなわち『五更鐘』という20刷も刊行されたこの本の成功により、ミス・ホワイトは、広学会から女性と少女らのための雑誌〔『女鐸』〕の編集を依頼されたとき、「はい」と答える勇気を持つことができた<sup>33)</sup>。

ここにおいて、ホワイトはこの「翻訳でもなければ改作でさえもない」『五更鐘』が、彼女「独自の物語」であったのだと説明している。すなわち、『五更鐘』の成功は、自身の役割に大きくよるものだとの方考え方を示した。

しかし、陳春生による『五更鐘』「自序」を見ると、ホワイトの役割は異なったものとして捉えられていることが分かる。また、同書には陳の「自序」の外に、邵寶亮と守拙山人らの「序」が載せられ、小説の出版に対する陳の貢献が讃えられている。すなわち、ホワイトと陳春生の両者は、それぞれ自身の役割の重要性だけを強調している。二人が実際にどのように作業を進めたのかは分かりにくいだが、左維剛と呉淳邦の研究<sup>34)</sup>によれば、陳春生には留学の経験がなく、英語の能力が殆どなかった可能性が高いといえる。ホワイトがトルストイの英文版もしくはフランス語版の小説を陳に紹介し、陳はその小説のストーリーだけを参照し、外国人の主人公を中国人に変え、原作の場面を中国人の馴染みやすい場面へと作り直したと考えられる。つまり、翻訳というより、翻案の作業がなされたと考えられる。

#### 四、『五更鐘』の概要と原典との比較

『五更鐘』は、あるお金持ちの坊ちゃんの回心の物語である。この坊ちゃんの名は林九如で、一人息子であるため、親に可愛がられていた。九如は少年時代に龐鳳兮という親友とともに学び、功名を立て官吏になって社会を救うことを目指していた。しかし、成人後、九如は何度も科挙に落ちることになった。それでも家が裕福で生活が豊かであったため、正業につかず放蕩息子になってしまった。それに対して、親友の鳳兮は、平安村に行って洗礼を受け、敬虔なキリスト教徒になった。九如の人生は、時に順調で、時に険しく、ある時には殺人の濡れ衣を着せられたこともあった。親友の鳳兮から何度かキリスト教に帰依するように勧められたが、彼自身の意志の不確かさや周囲の人々の反対で実現しなかった。九如は社会の荒波の中で一生を過ごし、その苦勞と不安を思い起こして深い感慨に耽った末にキリスト教に帰依する。

『五更鐘』のタイトルは最初の中文での翻訳が『五次召』であった。それは、イエスが五度、林九如に働きかけるという意味である。第1回目は九如と鳳兮が書房で聖書について討論する場面である。第2、3回目は、九如が生活の挫折を味わい、平安村に行かなかったことを後悔する時である。第4回目は、九如が鳳兮の手紙を読み、また平安村に行ってみようとする瞬間である。最後は、九如が自身の生涯を振り返り、雑念を捨て、友人の忠告に従い、キリスト教に帰依した出来事を指している。陳春生は清末の読者により受け入れられやすいように、同書のタイトルに中国的な特色を持たせるべく、『五更鐘』と改名したわけである。「五更」の「五」は、「五次」の「五」に対応する。また、五更は午前3時から5時までの時間帯を指している。昔の人はこの時に鐘を鳴らす習慣があり、新しい一日が始まることや、身の周りに危険があることを知らせるために使われた。ここでは、「五更鐘」は世俗的な社会に生きる人々をキリスト教に目覚めさせる鐘の音を意味する。

人生の重要な時期ごとに、心の警告と神の呼びかけがあったが、様々な要因によってそれを退けた主人公が、五回目の警告でようやく天の道を歩むことを決心し、キリスト教を信仰するようになるというストーリーの大枠はトルストイの原著と大きく変わらず、五回の神の呼びかけを受けるといふ流れも踏襲している。

もともと、トルストイの原作から削られているところもある。1887年に出版された英文版の *Walk in the Light While There is Light* と対照してみよう<sup>35)</sup>。英文版では小説の本編に先立ち、「幸福」をめぐる討論と『聖書』マタイによる福音書21章33-41節が引用されているが、これらは『五更鐘』では略されている。その討論の内容は、次の通りである。

一群の人たちが金持ちの家に集まって人生について議論していた。これらの人々は誰も幸せだとは言えない。彼らは自分達の生活がキリスト教的でないことを認め、誰もが自分や自分の家族のことにしか気かけず、誰もが他人のことに無関心で、まして神のことなど考えていなかった。一人の若者は、自分の財産を捨てて貧しい人の中に入りたいと思い、また自分の学業を捨てて貧しい人と一緒に働き、分かち合いたいと思った。しかし、彼の父親は、彼が本当の意味では生活を理解していないと反論し、経験を積んだ年長者の教えに従うべきだ、と述べた。しかし、別の中年の既婚男性は、若者が提案したように、自分の財産を手放し、妻や子供を愛することをやめ、本当に自分の心や考えに関心を持つべきではないかと述べた。男の話は、その場にいた妻を含む女性全員から、即座に攻撃された。一人の老婦人は、結婚する以上は責任を負わなければならないと思っていたほうがいい、と言った。老婦人はさらに続けてすべての男性は、家族を養うことに困難を感じたとき、彼の魂を救うためにすべてを手放すと言いたがる、それは不誠実で気弱だ、結婚している男には責務があるからその責務を無視してはいけないと論じた。その後、一人の老人が出てきて、自分は死すべき人間であり、死ぬ前に自分の財産を捨てて、神の意にしたがってキリスト教徒の生活を送りたいと主張した。しかし、彼の考え方は息子や後輩たちからも反対された、結婚した男性は妻と子供に苦勞させないために、結婚前のように敬虔に生活することができない。このよ

うにトルストイは書いている。

この「財産」を獲得し、保つことへの志向によるキリストに対する敬虔への妨害という論はホワイトの『五更鐘』では割愛されている。信仰のためには財産を捨てるべきという敬虔主義が中国の伝統的な家庭には受け入れられないだろうという判断があったと思われる。同時に、既婚男性を妻と老婦人が攻撃する姿も省かれている。中国の伝統的な家庭にはなじまないと考えられた可能性が強い。家庭関係の中で、男性は女性に対する「責任」を持つという表現は、清末社会において男性の「財産」と言っても過言ではない状態にあった女性の位置とは大きな落差がある。

ホワイトと陳春生は、トルストイの原典に見られるような、物言う女性の姿を削除した。だが、中国の伝統的な家庭のあり方をそのまま肯定すべきと考えていたわけでもないだろう。あらかじめ結論的な見通しを示すならば、儒教的な家庭とは異なるものとしての欧米的な「キリスト教家庭」を提示しようとしていたとみることができる。それはとりわけ原作にない部分にあらわれていると考えられる。『五更鐘』の第1章から第4章までは原作の第1章、第5章から第8章までは原作の第2章、第9章・第10章が原作の第3章、第11章からは第13まで原作の第4章、第5章に対応し、第14章と第15章は原作にない。第16章から第21章は原作の第6章、第22章は原作の第7章、第23章は原作の第8章・第9章、第24章が原作の第10章にあたる。全体として翻案しているものの、原作との対応関係を見出すことができる中で、第14章と第15章は、トルストイの原作に基づかない、著者たちによる新たな創作の割合が大きい。それだけ著者たちの考えをよくあらわす章であるといえる。以下では、この二つの章を中心として著者たちの考えを見ていくことにしよう。

## 五、儒教的な家庭 VS キリスト教的な家庭

ホワイトと陳春生の描くキリスト教的な家庭は、以下に見てゆくように、九如の妻と姑の衝突を描く場面によくあらわれている。第15章に挿入されたこの場面は、原典にはないものであり、翻案に際して新たに付け加えられたものである。

この章で中心的な役割を果たすのは、九如の三番目の見合い結婚の相手たる楊氏である。彼女の家族はもともと貧しく身分が低かったが、父親は仕事がまめで、人柄も誠実だったため、家庭の経済状況も比較的豊になった。楊氏は容貌がよく、纏足をしていたために足が小さかった。乱雑な交友関係にふけて過ちを犯したことを悔い改めた九如は、両親のとりなしで楊氏を娶り、婚礼の後ようやく楊氏と正式に対面した。結婚して一、二年後までの夫婦仲はまずまずで、楊氏も二人の娘を生んだ。しかし九如は将来的にはどうせ嫁に行く娘を持つのは損だと考え、腹いっぱい食べさせてやるだけで十分だと考え、彼女たちに対する父親としての慈愛をまるで示さなかった。やがて父を亡くし家の財産を引き継いだ九如は、自由気ままな性向が強くなり、遊廓などで遊び暮らすようになる。九如の母、李氏は嫁の楊氏をいじめる一方で、嫁を連れて廟に祈りにでかけ、家に男の子をもたらせてくれと祈った。

間もなく、楊氏はもう一人の子を出産したが、またもや女の子だった。緊張の最高潮に達した家庭関係は次のように描かれている。

九如は三人娘を憎んだが、九如の妻楊氏はますます彼女たちを可愛がった。九如の吐き気はかえって楊氏の愛を増やす道具になった。気の毒なことに、楊氏はこの三人の娘のために、どれだけ悔しい思いをし、どれだけ悔しい思いをしたらろう。元来は気性が荒く、人の冷笑に堪えられぬ女であったが、今となっては、人に噂されて笑われても、少しも怒るところがなかった（欧米人が子供は親の欠点を直すことができると話していたことを、楊氏は信じた）。彼女はねんごろに娘たちに接して、娘たちに少しの苦痛をも受けさせまいとした<sup>36</sup>。

楊氏は、姑には怒られ、夫には冷遇されながらも、子供のために気性の荒い自分の本性を抑え、自分の生活を犠牲にして娘たちを愛し、面倒を見る人物として描かれており、換言すれば「母性愛」の偉大さへの賛美を表す人物として描かれている。このような女性の犠牲精神の強調は、王と胡の先行研究が言及した、海外へと進出してゆく女性宣教師らの英雄主義への賛美と類似していると言える。もうひとつ注目すべき点は、率直な性格を持つ楊氏が自分の夫の行為に反対せず、不満を表明しなかったのに対して、姑に対しては以下に示すように、全く異なる態度をとったことである。これもトルストイの原作にはないものであった。

九如の母親である李氏は、息子の九如を可愛がったが、嫁の楊氏に対しては愛情がなく、食べ物を分け与えないばかりか、近所や親戚の前では嫁の家事が下手だと批判していた。李氏は、九如も父も家になかったある時に、朝食の粥が薄かったために嫁の楊氏を無能だと罵った。嫁の楊氏が不服そうに口をきくと、李氏は怒って楊氏のびんたを張った。楊氏は悔しがり、家の庭にある井戸に飛び込んだ。近所の親類や九如が駆けつけ、力を合わせて楊氏を救い出すことに成功した。

このような第15章の内容は、まさに中国の典型的な家父長制思想に基づく家族関係の中で、年配の女性が若い女性に対して非常に歪んだ態度をとる問題——嫁と姑の関係——を描いている。ただし、姑に批判された楊氏は反発し、周囲の人々を驚かせるほど激しく口論した末、井戸に飛び込むことで、李氏を驚かせている。

楊氏の言動に関するこのようなプロットは、九如が母たる李氏の支配から独立して、妻たる楊氏に向き合うようになるという流れの伏線とされている。例えば、著者は鳳兮の言葉を利用して以下のような論理を展開する<sup>37</sup>。

人は親を離れ、妻と結ばなければならない。成人した時には、親の恩を離れて、自分は所帯を持って自立すべきだという意味である。これは、必ずしも親元を離れて妻と同居しなければならないわけではない。旧約聖書にも、多くの預言者と聖人が親と同居して

いたと記されている。イエス様が亡くなられたときも、彼は母親のことを考えていた。

さらに、理想的なキリスト教家庭は、鳳兮の言葉として次のように描かれている<sup>38)</sup>。

- 一 配偶者は、必ず品行方正の熱心なキリスト教徒であるべきである。
  - 二 配偶者は、必ず自然の大きな足の〔纏足をしていない〕者であり、結婚後に家政を管理し、子供を常に子供の世話をし、完全な内助の功を果たすべきである。
  - 三 配偶者は、必ず書物を知り、文字を知り、才知を兼備し、子女を教育できる女子たるべきである。
- この三つは、実に泰西諸国の徳育体育及び智育という三大教育の根本である。そして孔子の智仁勇の三つに対応してもいるのである。

すなわち、キリスト教徒であること、妻として内助の功を果たすこと、母として子女の教育ができるような教養を持つことが、よき配偶者の条件とされている。これはキリスト教的であるとともに、孔子の教えにも適合的だとされていることに注意を要する。また、この点は仏教に対する批判的な描写と対照的である。

小説における姑の否定的な描写は、仏教を信奉する無知を象徴させるかのような描き方もなっている。李氏は嫁に息子を産んでほしいと仏を祈ってばかりいたが、息子が嫁に感化されてキリスト教徒となると、その信仰に反対した。その理由は、キリスト教徒は死んだ親に対して金紙を燃やして捧げないからだとされる

他方で、儒教はこのような「迷信」とは異質なものと描かれる。『五更鐘』において鳳兮は、「怪力乱神を語らず」という孔子の言葉を引用しながら、天国地獄をめぐる問題について「実は孔子は知っていても知らないこととしたのであり、無理に語ろうとしなかったのである」と述べている。鳳兮はさらに続けて、「残念ながら孔子はこのすべてを明らかにすることができなかったので、仏教は虚につけ込むことができ、輪廻の報いとか、閻魔大王の審判などの暴論を捏造した。鬼神を語らず生死を語らずという孔子の理屈よりも、論理的に完成されているように見えるので、儒教と同じようなものだと信じてしまいがちである」と語っている<sup>39)</sup>。

鳳兮は、仏教への容赦ない批判を展開する一方、儒教とキリスト教の親和性をアピールしている。このような仏教と儒教に対する姿勢の違いは、宣教戦略によると考えられる。上述のように、『五更鐘』の出版対象は中国人女性であるとされていたが、実際には、『通問報』の読者たる清朝の官僚らもホワイトの視野に入っていた。ここで、前述の『五更鐘』の編成過程で削除されたトルストイ原典の序について思い起こしたい。老婦人と若い婦人が連帯して夫を批判する描写は、儒教的な家父長制を前提とする男性読者には受け入れがたいものであり、同文の削除の背景には、儒教を信奉する士大夫たちとの衝突を避ける意図があったと



考えられる。それに比べて、次章で検討する売春という社会現象を取り上げるとき、『五更鐘』の著者は西洋文化における法治主義を隠そうとはしなかった。これらはホワイトと陳春生は当時の梁啓超が提唱していた西洋の理論を中国の「社会改良」のために利用するという背景と、読者の思想的特徴を十分に理解しつつ、キリスト教あるいは西洋文化のより受け入れやすいと思われる要素を選別的に伝えようとしたと考えられる。

『五更鐘』の物語においては、このようにキリスト教的であると同時に、儒教的な価値観とも親和的な家庭像が描かれる。楊氏はキリスト教に帰依した後、より忍耐強く家庭の状況に應對し、夫と娘達に対してはさらに優しくなる存在として描かれている。それでも、夫は楊氏の心の歷程に気づかず、大酒を飲み、外で遊び続け、家に帰ることが少なかった。姑は仏を拝み続けた。楊氏は次第に字を覚えて、キリスト教の祈りを熟知していった。ある日、九如は酒に酔って意識がなくなり、たまたま階段で足を踏み外して足を折った。それを見た姑は怒鳴り散らした。妻の楊氏は召使を手配して地元の名医を呼んで、九如を癒すことに成功した。楊氏は夫の浮気に文句を言わなかっただけでなく、彼が怪我をしている間は世話をし、薬や粥を作って回復を助けた。ここに至り、夫はついに感化され、キリスト教に帰依することを決意したと描かれている。

楊氏の経歴を整理してみると、姑と争って井戸に飛び込み危うく命を落としそうになったり、娘を産んでも夫が娘たちに無関心であるため鬱々としたりしていた状況から、キリスト教に出会い、聖書を読み、祈りを覚え、夫にその愚かさを知らしめて感化する状況に至っている。このような楊氏の物語は、愛と犠牲をもって家庭を円満にする存在となってゆく女性の進化と、これによる理想的なキリスト教家庭の実現の物語である。同時に、姑の存在を家庭から排除する物語でもある。

姑の存在に対するホワイトの批判は、彼女の実験の経験に基づいていると考えられる。彼女は、女性海外伝道協会の刊行物である *Woman's Missionary Friend* 1899年8、9、10月号に連載した「*The Evolution of a Chinese mother-in-law*」という文章において、高という姑が嫁に洗濯を強要したり、ご飯が軟らかいと文句を言ったり、あるいは嫁がアヘンを飲んで自殺しようとする場面を描いている。これらはいずれも『五更鐘』の李氏と楊氏の行為と良く似ている。1899年から、ホワイトが『五更鐘』を編集・翻訳する1902年までの間に、中国の姑に対するステレオタイプのイメージはあまり変わっていなかったことがわかる。

## 六、宣教師懐女史としてのホワイトの描写

『五更鐘』には懐女史という女性宣教師が登場する。ホワイトの姓 *White* を中国語で音訳した「懷特 (*Huaite*)」という言葉を思わせる命名から、彼女をモデルとしたものと思われる。この人物は、九如の妻楊氏と、娼婦李春玉をキリスト教に導いた人物でもある。懐女史の役割を理解する上では、トルストイの原典に登場する、李春玉に当たる人物——名の無い娼婦——に着目する必要がある。原典では、主人公 *Julius* が頻繁に付き合った娼婦は、最終



的には彼を捨て、彼よりも金持ちの男に付いていった人物としてのみ描写される（第2章）。一方で、『五更鐘』の第6章では、この娼婦に相当する李春玉の境遇について具体的な描写がなされている。彼女は、もともとは裕福な官吏の家に生まれたが、幼い時に家が没落し、両親を亡くした後、知らない人に売られて妓楼に行き、十一、二歳で売春生活を始めさせられた。だが、宣教師懐女史と出会うことでキリスト教に入信し、懐女史の名付けにしたがって「更生」と改名した。その後、更生は平安村で文字の読み書きを勉強し、九如の妻楊氏に文字を教え、二人で共に聖書を読むようになる」と描かれている。

また、同章には原典にはない次のような議論が加えられている<sup>40)</sup>。

良を売って娼となす、このような劣悪な行為は、もちろん西洋文明諸国には受け入れられず、事実上中国の法律でも禁止されている。残念ながら中国の役人は、一旦このような案件に遭遇すると、往々にして仲介人を姑息に扱い、女性を軽視する。(略) 米国には以前から批茶女史〔ハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896)〕がおり、黒人奴隷の解放を提案し、意外にも大功を成し遂げて世界に称賛された。中国で良婦を売る習慣をなくすことができれば、その功績は批茶女史に勝るだろう。

このように、『五更鐘』は、一方では中国人女性の社会的地位の低さを明らかにし、他方では黒人奴隷問題に対するストウの貢献を論じることで、世界に先駆けて抑圧される人々を解放した国としてのアメリカのイメージを提示した。そこでは女性宣教師もまた、売春婦とされた女性にとっての救世主として位置づけられている。

トルストイの小説には、主人公の妻がキリスト教に帰依するように導かれたという描写に相当するエピソードはないが、『五更鐘』では、その過程は次のように描かれる。九如が出かけて家にいなかったある日、平安村の更生女史と懐女史が手紙を届けに来た。手紙を出したのは九如の旧友である鳳兮だった。楊氏が苦々しい顔をしているのを見て、二人が何事かと問うと、楊氏は夫が娘を軽んじ、自分を冷遇するので涙を流しているという。三人は庭で話をしていたが、西洋の宣教師である懐女史を見ようと近所の人たちも集まってくる中で、キリストに関する討論を展開した。懐女史は聖書を取り出して楊氏にこのように説明した<sup>41)</sup>。

子供は神の賜物である（詩篇 127: 3）。懐女史は、この一節について息子は神から与えられたものだが、娘は神から与えられたものではないといった区別はしていない、息子も娘も神の賜物であり、娘を軽んじるのは、神の恵みを軽んじることだと説明した。懐女史が繰り返し説明した後、更生は優しい口調で楊氏を慰めた。「九如は今は愚かですが、やはり注意深く、この三人の子供を見てあげねばなりません。もし機会があれば、あなたの夫にも忠告してあげてください。でも、とにかく愛情のために、家庭を傷つけ

てはいけません。何よりもイエスに帰依することです。あなたにどんなにひどい苦しみがあっても、イエスがあなたに代わって負担してくれるのです。

ここでは、更生と懐女史が聖書の言葉を用いて楊氏を感化する場面が描かれている。二人は楊氏に娘たちの面倒をよく見るようにと説得し、たとえつらい思いをさせられても、また夫が愚かでも、家庭の感情を傷つけてはならないと説得している。注意しなければならないのは、ここで更生と懐女史が前提としている家庭が、夫婦と子供の小家庭に限られていて、その中には姑が含まれていないということである。さらに、二人は楊氏が姑に対していかに「孝行」すべきかということについてはいかなる助言も与えていない。つまり、中国における複数の世代が同居する大家族の構成パターンに対して、ホワイトは自らをモデルとする懐女史を通じて、夫婦と子供の核家族の構成パターンの重要性を説いたのだった。換言すれば、ホワイトは欧米的な家庭の「優越性」を強調したと言える。若い世代の中国人女性（嫁と売春婦）の救いをもたらすという文脈で、姑の救済を横に置いたのであった。

#### 七、校長・明女史としてのホワイトの描写

以上のように、ホワイトはその小説において、歳上の女性である義母の李氏に、妻の楊氏や売春婦の春玉／更生とは大きく異なる運命を与えた。それでは、より若い世代の女性である楊氏と春玉／更生らが辿った変化の描写からは、彼女のどのような考え方が見えるのだろうか。この物語において、ホワイトや陳春生は「婦人と児童は最後に」という事態をどのように認識し、どのように克服しようとしていたのだろうか。この問題については、トルストイの原著には相当する場面がない、第14章「女学堂の風景」の記述が手がかりとなる。

陳春生とホワイトが女性の学歴をどのように見ていたかについては、小説だけからは明確には確認できないが、喬昭の研究<sup>42)</sup>を参照することで、ある程度の推測が可能となる。上述のように、陳春生は五男一女を育てる家庭を持っていた。五人の息子は陳の自伝の中に紹介されており、長男は蘇州福音病院の主任に、次男は華人青年会体育幹事になり、三男は大企業のマネージャーであり、四男は南洋病院の医者となり、未子は金陵大学を卒業して有名会社の社員になったことがわかる。このように息子たちは社会的な成功を収めているようだが、陳は娘については一言も言及していない。娘の教育状況に関する記述も見つけることができない。女性にはかならずしも高度な学歴・教養は必要ないと考えていたと推定される。これに対して、ホワイトは南京において女性向けの大学を設立する必要を説いていた。

第14章のつづく場面では、鳳兮の叔父で、牧師である李道生が、娘の李掌珠を連れて訪ねて来る場面が描かれる。掌珠は十五、六歳で、「眉目秀麗で、艶やかで、丸く月のような前髪を額に被り、うしろの三つ編みにリボンを結んでいる」、服装は「上は乳白のシャツ、下は黒い革の靴」と記述されている<sup>43)</sup>。教会の中学堂で八年間勉強し、天津のイエス聖教固本女学堂（女子大学堂レベル）に入学したばかりという設定である。後に叔父が掌珠の学校

に行こうとした時、鳳兮ばかりか九如もついて行き、皆で女学堂に行くこととなる。

女学堂の洋館は「まばゆく」「すばらしい風景」であり、学堂の校長である明女史は「規則に非常に厳しく、女学堂内には閑人は入ることができない」と語っている。学堂の指導者である王先生は李道生の長年の友人であった。掌珠は英語で明女史と会話し、生徒たちは姉妹のように仲が良かった。王先生の家の裏庭には学校の体操場が見えた。九如は好奇心を抱き、なぜ女子生徒は読み書き以外に武芸を学ばなければならないのかと問うた。「中国の男性は外で〔働き〕女性の内〔家庭を守る〕、女性は優しく平和だと思えばよいのでは？」。これに対して王先生は次のように答える<sup>44)</sup>。

のんびりして静かで、優しく平和である。これらはただ女性の徳目と気質を指すものである。〔だが彼女たちを〕拘束することで、走ったり歩いたりさせないで、〔彼女たちを〕のんびりして静かで、なよなよと弱々しく、優しく平和である、と言ってよいだろうか！これは大きな間違いだ！キリスト教の男女併重〔男女を等しく重視する〕の道理に合わない。それだけではなく、中国の書物に従うのも間違いだ。(略)女性には文武両道が必要である。第一には身体を動かして病気を生じぬようにし、第二には自分を人から侮られぬようにし、第三に国を侵されぬようにし、第四に自分が丈夫であれば子どもも丈夫となるという、まさに強種〔種を強める〕の方法である。

ここで小説は王先生の言葉を借りて、キリスト教の「男女併重」に言及しているが、これはホワイト自身の考え方の表現であったと思われる。女学堂の校長である「明女史」という名前からは、ホワイトの中国語名である「亮楽月」の「亮」が思い起こされる。「明亮」は中国語の語彙で、「明るい」という意味を持つ。1902年当時にホワイトが鎮江で音楽教師をしていたことを踏まえれば、この章の女学堂の描写はホワイトの求める女学堂のあり方を陳が描いた可能性が高いと推測される。女の子たちは身なりがきれいで若々しく、言葉遣いも丁寧であることを理想とする描写には、女性は女性らしくという価値観があらわれている。他方で、女性が外国語を話す能力、知識や識字などの技能を身につけるだけでなく、身体を強くすることもできることを強調している点では、中国社会における慣行からの女性の解放という文脈への意識が窺われる。「走ったり歩いたりさせない」という表現からは、上流階級を中心に広がっていた纏足の習慣が意識されていたとみてよいだろう。「丈夫な体は病気を遠ざけるだけでなく、次の世代の体を丈夫にする」という言葉や「強種」という表現からは、日清戦争敗北後に康有為・梁啓超らが掲げた変法自強運動を意識していたことが窺われる。ホワイトは、『五更鐘』は女性向けの文学であると唱えていたが、こうした点に着目すれば、同書は娘をキリスト教系学校に通わせることを躊躇する男性たちの視線を意識した作品でもあったと考えられる。当時『通問報』を読むことができたのは基本的に官僚か学者であり、中国社会に影響のある親たちであった。上記の描写は、このことを知った上で、陳

春生が選択したものであった可能性もある。

おわりに

本稿はアメリカ女性宣教師ホワイトの文書宣教活動を彼女のキリスト教宗教小説『五更鐘』を通して見てきた。第一章ではホワイトが海外に派遣された背景及び彼女の翻案・創作出版物について整理した。第二章では『五更鐘』の出版以前の広学会の女性への文書宣教の方針、及びそこにおけるホワイトの位置づけを明らかにした。第三・四章ではホワイトと陳春生の著作過程における役割や、トルストイの原典と異なる表現方法を分析しながら、『五更鐘』は厳密な翻訳著作ではなく、ホワイトと陳春生が当時の中国人にとって馴染みのある中国社会の状況に基づいて翻案した出版物であることを明らかにした。これらの章では、ホワイトはリチャードとの会話の中で、陳春生の役割に言及せず、早い段階から積極的に中国人女性ための出版物を作り出した自身の貢献を強調したことを確認した。また、広学会の歴史の流れからもわかるように、女性ための書籍が極めて少ない状況の中で、ホワイトは女性ための読み物の作成を志したと同時に、女性による読書への抵抗感を克服するためにはまず、中国人男性の考え方を変えねばならないということも認識し、『五更鐘』の想定読者として、男性知識人・官僚らも、その視野に入れたと指摘した。『五更鐘』が男性読者の目を意識していたということは、同書と原典との比較により、小説の冒頭部分である「幸福」をめぐる議論——「財産」の放棄や女性から男性への攻撃などの中国の伝統的な家庭、あるいは清末における男性たちに受け入れにくい要素を含む箇所——が削除された事実からも推定できる。

第五・六・七章は『五更鐘』の内容を通してホワイトの考えを分析した。『五更鐘』の第14章と第15章における、原典には存在しない新しく加えられた場面では、ホワイトは中国の家父長制を代表する姑と嫁の関係——男性より低い家庭位置にいる女性達の間にある、互いに傷つけあう関係性——を看過し、姑の李氏の仏教に対する信仰を批判した。そのうえで、欧米的な理想的なキリスト教家庭の有り方の「優越性」を強調した。また主人公の妻である楊氏と売春婦である更生のキリストによる救済が描写された一方で、姑への孝行や救いは描かれなかった。その背景には、中国の伝統的な大家族というモデルに対して、夫とその妻は内助の功を果たすという核家族の関係への理想視があった。また、女子教育に熱心であったホワイトが持つ中国女性解放思想は女子の読み書きは言うまでもなく、身体的な訓練をも含む女学を重視し、女性の活動領域を広げていこうとするものでありながら、女子教育による「強種」という清末の思想にも適合的な形の考え方であった。それは「夫唱婦随、夫為妻綱」という中国在来の儒教的な価値観への妥協や、仏教信仰への強烈な批判を込めながら、キリスト教宣教を優先的な順位に置く同書のスタンスを反映している。

一方で、とりわけ「強種」の考え方の例に見られるような、『五更鐘』における中国在来の価値との距離感のとり方が現にどの程度ホワイト個人の考え方によるのか、編者の陳春生

のそれによるのかという問題は、本稿に残された重要な課題である。我々が目にする『五更鐘』が成立するまでの過程で、両者の間には具体的にどの程度の意見交換がなされたのか。また、どのような調整や妥協があったのか。今後の研究では、これらの問題に取り組むことで、単に「保守的」であるという一言には収斂され得ないホワイトの女性観及び家庭観の性格をより明らかにすることを目指す。

## 註

- 1) Zhou, Yun. *Christian Women and the Making of a Modern Chinese Family: An Exploration of Nü duo 女鐸, 1912-1951*. 2019. Australian National University, PhD dissertation. また、『女鐸』に関する研究としては、劉麗霞「現代激進主義文化思潮中的家庭重建—以《女鐸》小説中的婚姻家庭觀為視角（現代ラディカル文化思潮における家庭の再構成—『女鐸』における婚姻家庭觀を視角として）」『雲南民族大学学報』第29巻第3期、済南大学文学院、2012年。孫浩然「1912-1922年《女鐸》文本與婦女運動的關係（1912-1922年の『女鐸』テキストと女性運動の關係）」『雲南民族大学学報』第30巻第3期、雲南民族大学人文学院、2013年。余麗麗「《女鐸》及其家庭育兒教育問題研究（『女鐸』及びその家庭育兒教育問題の研究）」、広西師範大学修士論文、2014年。吳艷玲「溫和的女權主義—《女鐸》與近代中国女性自我構建（溫和な女權主義—『女鐸』と近代中国における女性の自己構築）」『揚州大学学报』、揚州大学、2015年などがある。
- 2) チョウによれば、ヴィクトリア朝の女性観 (Victoria Womanhood) は純粹 (pure)・貞淑 (chaste) であり、洗練され (refined)、謙虚 (modest) である女性を理想とする。
- 3) 宋莉華「美以美会伝教士亮樂月の小説創作與翻譯（メソジスト宣教師ホワイトの小説創作と翻訳）」『上海師範大学学报』第41巻第3期、上海師範大学人文與傳播学院、2012年。Wong, Tin Kei. “Translating Western Girlhood: Laura M. White’s Chinese Translation of Sara Crewe (1888).” Chan, K. K. Y., and Garfield Lau, C. S. (Eds.) *Cross-Cultural Encounters in Modern and Premodern China. Chinese Culture, Vol. 3*. Springer Singapore, 2022. *SpringerLink*, [https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-981-16-8375-6\\_7](https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-981-16-8375-6_7). Accessed 20 November 2022.
- 4) 前掲、宋莉華、100頁。
- 5) 『小公主』（1913）の原典はアメリカの小説家フランシス・ホジソン・バーネット (Frances Hodgson Burnett, 1849-1924) による *Sara Crewe* (1888) である。物語ではイギリスの資本家の家に生まれた女の子セイラが父親を亡くした後、貧しい生活状況に直面しながらも、楽観、善良、威厳を保っていたことが描写されている。自分の望みをおいて隣人を愛することを強調するキリスト教の思想に基づく自己犠牲の精神は、ホワイトの文章で少なからず言及されており、セイラは、ホワイトがその翻訳小説で伝えようとしていた自己犠牲精神の模範といえる。
- 6) *Op. cit.*, Wong, p. 128.
- 7) 王曉慧・胡金平「清末民初大批美国女传教士執教中国女学的原因探析（清末民初アメリカ人女性宣教師らによる中国女学への教育従事大挙の原因の分析）」『現代大学教育』第6期、南京師範大学教育科学学院、2011年。
- 8) 同上、59頁。
- 9) 小檜山ルイ『帝国の福音—ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』、東京大学出版社、2019年。



- 10) 同上、27 頁。
- 11) “Miss Laura M. White: Missionary, Musician and Writer Dies in Philadelphia.” *New York Times* (1923), 26 January 1937, p. 21. *ProQuest*, <https://www.proquest.com/historical-newspapers/miss-laura-m-white/docview/102028069/se-2>. Accessed 20 November 2022.
- 12) *Twenty-Second Annual Report of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church. For the Year 1890–91*, Boston: Heathen Woman’s Friends, p. 128.
- 13) テンプル大学 (Temple University) はフィラデルフィアにあるグレースバプテスト教会 (Grace Baptist Church) の牧師により、1884 年に設立された大学である。
- 14) 西崎緑「監理公会女性海外伝教会及其在華的慈善活動 (メソジスト教会女性海外伝道協会及びその中国における宣教活動)」『雲夢学刊』第 41 巻第 6 期、雲夢学刊雑誌社、2020 年、33 頁。
- 15) 単位は「元」である。
- 16) 前掲、宋莉華、99 頁。
- 17) 前掲、宋莉華、96 頁。
- 18) 陸国飛「清末民初翻譯小説目録 (1840–1919) (清末民初翻譯小説目次 (1840–1919))」、上海交通大学出版社、2018 年、240 頁。
- 19) 前掲、宋莉華、97 頁。
- 20) 前掲、宋莉華、96 頁。
- 21) *The Thirty-First Annual Report of the Christian Literature Society for China Whose Object is the Diffusion of Christian and General Knowledge. For the Year Ending September 30th, 1918*. Shanghai: Shanghai Mercury, 1918, p. 7.
- 22) 陳芸瑞「近代西人在華創辦的出版機構發展之探析 (近代西洋人の在華出版機関に関わる調査と分析)」『文教資料』第 751 期、四川師範大学、2017 年第 11 期、64 頁。
- 23) White, Laura M. “Women and Children Last.” *International Review of Missions*. 1929. 『国際宣教評論 (International Review of Missions)』は 1912 年に創刊されたキリスト教の活動に関する学術雑誌で、世界宣教師会議 (International Missionary Council, 現在の世界教会協議会 World Council of Churches の前身) の定期行物である。
- 24) ヤング・J・アレン (Young J. Allen / 林樂知、1836–1907) は清末期に南部メソジスト教会によって派遣されたアメリカ人宣教師である。
- 25) Op. cit., White, Laura M., “Women and Children Last.”
- 26) 「文理」(Wenli) という言葉は 19 世紀来華宣教師の用語であり、古典文体の文章 (文言文) のことである。宣教師の来華以後、『聖書』は「深文理」、「浅文理」、「官話」で翻訳された。「浅文理」は「深文理」より分かりやすい文言文のことである。「官話」とは「官僚の言葉」——清朝の官僚達の日常用語——である。馬雲霞「《聖經》“二馬” 訳本的語言問題 (聖書「二馬」訳本の言語問題)」『周口師範学院学報』第 29 巻第 6 期、上海外国語大学、2012 年、54 頁。金婷の研究によると、「官話」は北京話を中心に北方方言が融合したものであり、当時清朝政府が南方にも推進したことで、中国人の三分の二が理解する用語となったとされる。今日の「普通話 (中国語)」は「官話」から発展したものである。1912 年に出版された『女鐸』が「官話」で書かれたのに対して、『五更鐘』の中文は『女鐸』よりも読みにくく、「浅文理」(文言文) よりも分かりやすいものである。すなわち、『五更鐘』に使われた文体は「浅文理」と「官話」の中間レベルのものだといえる。また、金婷の研究によれば、1890 年時点の清朝における教育を受けた者は、男性は男性の総人口の 1% を、女性は 0.0001% (百万分の一) を占めていた。「官話」で出版さ



- れた書籍は比較的読みやすいとはいっても、それでも読めない人が大多数であったと思われる。金婷「中文聖經官話《和合本》翻譯史中的譯者（中文聖經官話『和合本』翻譯史における翻訳者）」、上海外国語大学修士論文、2014年、25-26頁。
- 27) 清朝末期から民国の初頭にかけての中国人の識字率は確認されておらず、師萍萍の研究がその理由を次のように説明している。第一に、当時の人口数が不明であること。第二に、統一した教育制度がないため、学校教育の規模が不明であること。第三に、識字率という概念がなかったこと。換言すれば、幾つかの文字が認識できれば識字者と認定できるとしても、「深文理」、「浅文理」、「官話」のような日常と異なる書記用の文体があるので、文字だけわかっても文章を読めるとは限らないということである。師萍萍「民国時期的識字運動(1928-1937)（民国時期的識字運動(1928-1937)）」、華中師範大学修士論文、2009年、18頁。さしあたり当時の中国における読み書きのできない人は80%-90%と師萍萍は推定している。識字率は都市よりも農村において低く、男性よりも女性において低かったことは間違いないだろう。
- 28) 前掲、陸国飛、171頁。
- 29) 鄭艶紅「伝教士與近代中国図書出版（宣教師と近代中国図書出版）」、河南大学修士論文、2008年、18-19頁。
- 30) 喬昭「陳春生の生涯と著作」『東アジア文化交渉研究』第14号、東アジア文化交渉学会、2021年、251頁。
- 31) 陳春生「自序」、ホワイト・陳春生『五更鐘』、美華書館、1909年。
- 32) 左維剛・呉淳邦「托爾斯泰經典的重構改編：陳春生《五更鐘》的本土化訳述策略研究（トルストイの再構成と翻案：陳春生『五更鐘』の中国化戦略の研究）」、『中国小説論叢』第44輯、韓国中国小説学会、2014年。
- 33) Op. cit., White, Laura M., “Women and Children Last.”
- 34) 前掲、左維剛・呉淳邦、217頁。
- 35) Tolstoy, Lev. *Walk in the Light While There Is Light*. 1887. *Internet Archive*, [https://archive.org/details/WalkInTheLightWhileThereIsLight\\_LevTolstoy/page/n1/mode/2up](https://archive.org/details/WalkInTheLightWhileThereIsLight_LevTolstoy/page/n1/mode/2up). Accessed on 31 August 2022.
- 36) ホワイト・陳春生『五更鐘』、美華書館、1909年、118頁。
- 37) 同上、77頁。
- 38) 同上、80頁。
- 39) 同上、97-98頁。
- 40) 同上、44頁。
- 41) 同上、123頁。
- 42) 前掲、喬昭、251頁。
- 43) 前掲、ホワイト・陳春生、100頁。
- 44) 同上、104頁。